

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370293

研究課題名(和文) 1920年代アフリカ系アメリカ女性作家による抵抗の言語行為とその継承

研究課題名(英文) African-American Women's Literature of Resistance in the 1920s and Its Inheritance

研究代表者

鶴殿 悦子 (UDONO, Etsuko)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：00128638

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、平成24年までの科研費研究で明らかになった点(トニ・モリスン文学とハーレム・ルネサンス期アフリカ系アメリカ文学の修辭的關係)を基盤にして、1920年代アフリカ系アメリカ女性作家の文学とモリスンら現代アフリカ系アメリカ女性作家の文学とのインターフェイスを探ることにある。とりわけ、フォーセット、ハーストン、ラーセンの文学に新たな光を当て、現代アフリカ系アメリカ女性作家の文学テキストとの共鳴関係を探りたい。検証に際してはポストコロニアル批評の分析手法を援用して過去の文学作品群の再検討を行い、それが現代アフリカ系アメリカ女性文学にいかに関承されているかを検証したい。

研究成果の概要(英文)：This research aims to examine the interface between the literature of African-American women in the 1920s and at present on the basis of my former Kaken Research concerning Toni Morrison's literature. The present research focuses in particular on Jessie Redmon Fauset, Zora Neale Hurston, and Nella Larsen and attempts to unveil a hidden resonance between their literature and contemporary African-American women's literature, including Morrison's. Using postcolonial analytic techniques, this research examines how contemporary African-American women's literature is closely connected with the literary achievements of African-American women in the 1920s, when they first appeared on the literary scene.

研究分野：人文学

キーワード：英米文学 アフリカ系アメリカ文学 物語の枠組み 人種 ジェンダー/セクシュアリティ ハーレム・ルネサンス

1. 研究開始当初の背景

(1) 平成21年から24年の4年間にわたる科学研究費補助金基盤研究(C)「トニ・モリスン文学テキストにおけるおとぎ話深層構造の分析」において、モリスンの小説全体を物語構造の観点から分析し、その成果が博士學位論文「トニ・モリスンの小説における物語の枠組みと三角形のきずな」(筑波大学)となった。本研究の柱となるのが「物語の枠組み」という概念である。モリスンの小説には必ず何らかの物語の枠組みが隠されているが、物語の過程でまったく別の物語へと作り変えられ、その転換がコンテンツの転換と一致していることを検証した。物語構造そのものについては Terry Otten, J. Brooks Bouson, Doreatha Mbalia らの研究はあるものの、この研究のような観点からの分析はまったく新しいものである。

(2) 上記の研究から、モリスンが、同時代のアリス・ウォーカーや、ハーレム・ルネサンス期のゾラ・ニール・ハーストン、ネラ・ラーセンらの小説を、物語の枠組みとして使用していることに気づかされた。その一見しただけではわからない引用の仕方には、他のアフリカ系アメリカ芸術との共通点が見いだされる。例えば、黒人音楽を起源とするジャズは引用性を特徴としている。同時代および前時代の文学・芸術との共鳴関係を垣間見させるモリスンの技法から、今回の研究のヒントを得た。

(3) 本研究テーマは、1920年代ハーレム・ルネサンス期のアフリカ系アメリカ女性文学と、現代アフリカ系アメリカ女性文学(主としてモリスン)のインターフェイスを探るものであるが、その理由は、先に述べたように、例えばモリスンは、特に前世代のアフリカ系女性作家のテキストを作品の中で幾度も引用しているからである。これまで、作家や時代については多くの研究があるものの、影響関係についての研究は全般的な内容でしかなく、多くは新しい切り口を示していない。本研究では、ハーレム・ルネサンス期に活躍したジェシー・レドモン・フォーセット、ハーストン、ラーセンに着目し、彼らとモリスンら現代作家のテキストとの共鳴関係を分析し、二つの時代の接点について考察してみようと考えた。

(4) フォーセットは当時 NNACP 機関誌『クライシス』の文学部門の編集に携わり、多くの黒人作家・詩人たちを世に出し、また、自らも小説を数多く書いているにもかかわらず、この時代が終わるとすぐに忘れ去られた。一方、ラーセンは将来を囑望された若き小説家であったにもかかわらず、複雑な事情の剽窃事件にかかわり、筆を折らざるをえなくされたが、この件もほとんど問題にされずすぐに忘れ去られた。こうしたことはマイノリテ

ィと表現の問題として今日の状況にも通じる。1920年代当時のアフリカ系アメリカ女性作家に起きたことは、日本における問題と決してかけ離れたことではない。ハーレム・ルネサンス当時の出版状況と黒人作家との関係について分析し、初めて出版の舞台へと現れた黒人作家たちがどのような方法によって主流文化に直面しようとしたか、とりわけ、当時の黒人女性作家たちが差別社会と立ち向かうために取った戦略、特にその修辭的戦略について考察することは重要である。

2. 研究の目的

(1) 前年度までの科研費補助金による研究で明らかになった点(トニ・モリスン文学とハーレム・ルネサンス期アフリカ系アメリカ文学の修辭的關係)を基盤として、1920年代ハーレム・ルネサンス期のアフリカ系アメリカ女性作家と現代アフリカ系女性作家とのインターフェイスを探ることが、本研究の目的である。とりわけ、当時根拠薄弱な理由で弾劾されるか無視されるかしたラーセンとフォーセットの文学テキストに光をあて、現代文学テキスト(特にモリスン)との比較・参照のうちに相互の共鳴関係を掘り下げてゆく。検証に際してはポストコロニアル批評の分析手法を援用して過去の文学作品群の再検討を行い、現代アフリカ系文学との継承・影響関係を検証することを目指す。

(2) まず、ネラ・ラーセンの剽窃事件の事情を文献および実地調査により調査する。1920年代には多くのアフリカ系アメリカ作家が頭角を表し始めたが、多くのメディアは彼らには閉ざされたままであった。とりわけ黒人女性作家には特に厳しい状況があった。そのような中でラーセンは、1930年『フォーラム』誌に短編小説を書く機会を得たが、そのような貴重な機会を盗作疑惑によって失ってしまう。ラーセンの盗作事件には複雑な事情があることはすでに指摘されている。同時代のハーストンも同様に剽窃と見紛うふるまいをしている。マイノリティの作家 女性であり黒人である場合が、少ししか与えられないチャンスをもっとも有効に使おうとする場合、どうするか。自分たちが不当に置かれている苛酷な現状に対する批判も同時に行おうとするのではないか。ラーセンは自らの短い作家経歴の最後のものとなった短編小説「サンクチュアリ」(1930)でそれを行ったが、誰にもその意図を理解されことなく、盗作の汚名のまま闇に葬られた。彼女の最後の創作から90年近く経過した今、その謎とラーセンのメッセージを解読することを目指す。

(3) この解読のために利用するのは、G. C. スピヴァクが論文「サバルタンは語ることができるか」(1988)と「シルムールの王妃」(1985)

で使った手法である。スピヴァクは、謎の死を遂げたインド人女性プバネシュワリ・パドゥリの自殺の真相を、その事件から62年後に初めて解読してみせた。同じ古文書調査の手法を使って、ラーセンの作家人生をかけた「サバルタンの書き込み」を現代に甦らせたいと考える。フォーセットについても、同様の手法を使い、彼女が小説の中に残したメッセージを読み解くことを目指す。そうした作業を通じて、ハーレム・ルネサンス期という短い期間に、作品を出版するという数少ない機会を得た数少ない黒人女性たちが、どのような文学作品を世に問い、どのようなメッセージを送ろうとしたのかを究明することを目指す。そして、その作品やメッセージが当時から今日に至るまでいかに誤解され無視されてきたか、しかし、同時にそれが、いかに同じ苦悩を経験した現代の黒人女性作家の共感を得、その作品の中に受け継がれてきているかを検証することを目的とする。

(4) 本研究により、ハーレム・ルネサンス期の文学を、単に白人男性モダニズムの模倣であるとかいう従来の観点以外から見るができるようになることが期待できる。この時代の黒人女性作家たちの考えや芸術についての理解を深めることは、モリスンへと至る現代女性作家の分析にとっても重要である。前年度科研費による研究のテーマの一つは、「女どうしのきずな」 アドリエンヌ・リッチ言うところの「レスビアン連続体」であり、モリスンの文学テキストにおけるセクシュアリティ、ホモエロティシズムについての分析を行ったが、今回の研究においても引き続きその観点からの考察を行う。

(5) ハーレム・ルネサンス期の研究としては、代表的なものとして Nathan Irvin Huggins, Cary D. Wints, Cheryl A. Wall, George Hutchinson, Houston A. Baker, Jr. 等の研究を挙げることができる。黒人音楽を起源とするブルースやジャズが隆盛し、1920年代がジャズ・エイジと呼ばれるほどの活況を呈したことも手伝い、この時代の黒人文学は白人優位・男性中心のモダニズム芸術運動の一環であると見なされてきた。しかし、例えば近年のブルース研究が示すように、ブルースは単に黒人女性の嘆き節という単純なものではないことが明らかにされている。黒人女性を性的存在として貶める伝統的偏見と軽蔑に対する女性ブルース歌手たちの抵抗が、巧妙な表現方法を駆使して行われていたことが、Hazel Carby, Hortense Spillers, Wall 等の研究によって明らかにされている。本研究はこうした先行研究をしっかりと踏まえた上で、それらへの再考を行う。

(6) 先行研究を尊重しつつも、本研究の特色は、ハーレム・ルネサンス期の黒人女性作家たちが「サバルタンの抵抗」をどのような形

で行っているかの検証を、古文書を解読するポストコロニアル批評の手法を援用し、新しい手法で行うことである。そして、モリスンのような現代作家が、一見それと気づかれないようなやり方で、過去の黒人女性作家の文章を引用したり、物語の枠組みを借用したりしているという間テクスト的なありようをさらに検証し、両者の間の緊密な接着面に着目する。そうすることによって、ともすれば「黒人文学」という孤島に閉じこもりがちなアフリカ系アメリカ文学研究を、新たな理論的な展開へと開くことができるのではないかと考える。

3. 研究の方法

(1) 文献の読み込み

平成25年から27年にかけて、フォーセットとラーセンのテキストの精読を深化させると同時に、アフリカ系アメリカ文学研究の新しい動向に眼を配った。

25年度は、当該研究に必要な文献を収集することから始めた。ハーレム・ルネサンス研究関係図書その他、フォーセット、ラーセン、ハーストン等の主要テキストの他に、同時代に活躍した Dorothy West, Langston Hughes, Alain Locke, W. E. B. Du Bois, Sterling Brown, Countee Cullen, Rudolph Fisher, James Weldon Johnson, Claude McKay 等、1920-30年代の作家・詩人・理論家の文献を整備し、読み進めた。

また、Lisa Thompson, *Beyond the Black Lady* (2009), Evelyn J. Schreiber, *Race, Trauma, and Home in the Novel of Toni Morrison* (2010), Arlene R. Keizer, *Black Subject* (2004), Ira Berlin, *Generations of Captivity* (2003), Jacqueline Golsby, *A Spectacular Secret* (2006), Paul Evans, *Song of My Soul* (2008), Valerie Smith 等、重要であるが大学図書館に未所蔵だった研究書を整備した。毎年多くの研究書・研究論文が出版されるので、3年間にわたって少しずつ読み進め、全体的な批評の動向を把握できるよう努めた。ポストコロニアル批評、ジェンダー批評、人種/エスニシティ研究の文献も整備し、読み進めた。

(2) 研究発表

研究の方向性について国外からの反応を得るために、25年に、ポーランドのシュチェチンで開催される(会場はシュチェチン大学等)、International American Studies Association 第6回国際大会において、“Trans-Atlantic Textual Exchange: Nella Larsen and Sheila Kaye-Smith”と題する研究発表を行う。本発表の内容は、ラーセンと同時代のイギリスの流行作家シーラ・ケイスマスのテキストの比較から、当時のアメリカにおける、黒人作家、特に黒人女性作家の出版状況を分析したものである。この発表の原

稿は本研究の出発点として位置付けられる。また、日本国内でも複数回研究発表を行う。

(3) 研究論文の執筆・出版

博士学位請求論文『トニ・モリスンの文学における物語の枠組みと三角形のきずな』（25年9月提出）に、本研究で得た知見を盛り込む。

26年度、共著書『エスニック研究のフロンティア』（金星堂）を出版する。27年度、単著書を出版する。28年度、共編著書と共著書を出版する。

また、International American Studies Association 大会での発表原稿を元に英語論文を完成させる。

(4) 資料収集・現地調査

アメリカ合衆国に行き、ニューヨーク公立図書館、コロンビア大学図書館等に所蔵されているハーレム・ルネサンス期の文献資料を閲覧し、デジタル化されているものは入手し、そうでないものはコピー、撮影もしくは筆写して収集する。シヨンバーグ黒人文化研究所にも赴く。

ラーセンらが文学活動を行なったニューヨーク、ハーレム地区を訪れ、現地を実際に歩き、作品中の場所のイメージを把握する。

4. 研究成果

(1) 文献の読み込み

研究テキストの読み込みを進めることができたが、参考文献に関しては十分できたとは言えず、読み込みの作業はともすれば遅れがちになった。しかし、その過程で重要な発見があった。

研究対象の一つとしていたフォーセットの文学は、テキスト再精読の結果、その名は知られているものの傑出した文学的業績とは言いがたいと判断され、研究の力点をそちらには置かないことにした。反対に、ラーセンの文学は想定外に優れたものであることが判明した。その結果、当初の研究目標を変更する必要があると考え、本研究を予定していた期間より一年間早めて終了し、新たな目標に向けて舵を切り直すこととした。

(2) 研究発表

平成25年、International American Studies Association 第6回国際大会において、“Trans-Atlantic Textual Exchange: Nella Larsen and Sheila Kaye-Smith”と題する研究発表を行った。発表に対して出席者から好意的なコメントを得たことに加え、諸外国から参加した多くの研究者と情報の交換をすることができたことは有益だった。

また、26年、愛知県立大学主催の教育研究発表会において、28年、日本アメリカ文学会中部支部例会および黒人研究学会例会において研究発表を行った。また、28年、筑波大

学アメリカ文学会例会において講演を行った。いずれの発表・講演においても本研究の知見が活用されている。

(3) 研究論文の執筆・出版

上記研究発表原稿を基盤にして論文を執筆し、本研究期間に1つの論文、1冊の単著書、1冊の共編著書、2冊の共著書を公刊することができた。単著書『トニ・モリスンの小説』（彩流社、2015）は第一回日本アメリカ文学会賞を受賞し、「我が国におけるモリスン研究において必須の基礎文献となるであろうことに疑いの余地はない」（編集委員長）との評価をいただいた他、数多くの書評で高く評価された。上記いずれの著書・論文にも本研究の研究成果が反映されている。

また、ポーランドでの学会発表原稿を元にした英語論文“Trans-Atlantic Textual Exchange: Nella Larsen and Sheila Kaye-Smith”を完成させ、現在アメリカの学会誌に投稿中である。

(4) 資料収集・現地調査

25年、二度に分けてアメリカ合衆国ニューヨークに滞在し、その周辺地区を現地調査した。ハーレム地区に赴き、ラーセンや1920-30年代の黒人芸術家や知識人が活躍した場所を目で確認した。また、ニューヨーク公立図書館、コロンビア大学図書館、シヨンバーグ黒人文化研究所に赴き、資料を閲覧した。当時の写真資料を閲覧でき有益であった。

本研究以前は、私は主として印刷された文献資料を元に研究していたが、今回の研究から新しい手法を取り入れ、実際に自分で歩いて確かめるという実地調査の方法をとった。これは、先述のスピヴァクやラーセンの画期的伝記作者ハッチンソンがとった方法である。慣れない作業のためたいへんな苦痛を伴った。しかし、徐々に進行であるにしても、本研究を出発点として今後も継続して行かなければならない。

(5) 研究の結果、いくつかの新しい事実が明らかになった。前述の作家の再評価に加えて、もう一つの発見は、1920年代ハーレム・ルネサンス文学はいまだ玉石混淆の状態の研究されているという事実である。アフリカ系アメリカ文学の研究が進んだとはいうものの、英米主流文学の場合と違い、まだまだ不十分である。先行研究を疑うことなく踏襲している研究が多いのではないかと。つまり、間違いもそのまま踏襲されている。作品の評価とは関係のない政治的意図や力関係が働いている場合もある。それを正していくことが必要であろう。

そもそも、1920年代とか、ハーレム・ルネサンス期という時代が黒人文学に本当にあったのだろうか。それは、そのようなものを作りたいという政治的意図があって作られた人工物なのではないか。そのことを象徴

する存在が黒人女性作家である。当時どれほど多くの才能のある黒人女性作家がいたのだろうか。例えばフォーセットはどうか。また、ラーセンは若くして執筆を中止せざるをえない苦境に追い込まれたが、そこにどのような見えざる意図が働いていたのだろうか。その時期黒人女性作家にも活躍の場が与えられたが、1920年代を過ぎるとほとんどの女性作家が文学市場から忘れ去られていったが、本当に優れた作品を残したのはどのような人々だったのだろうか。そのような根本的な問いから始めなければならないということが痛感される。

本研究の成果を元にして、ラーセンとモリスンの共鳴関係を中心とした次なる研究課題へと継続的に歩を進め、できる限り近い将来、研究書として出版することとする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

すべての研究は「鵜殿えりか」の筆名のもとに行われている。

〔雑誌論文〕(計 1 件)

鵜殿えりか、「トニ・モリスンの『レシタティーフ』における三角形のきずな」『ことばの世界』(愛知県立大学高等言語教育研究所年報) 査読無、No. 5、2013年、111-123ページ

〔学会発表〕(計 5 件)

鵜殿えりか、講演「トニ・モリスンの小説」筑波大学アメリカ文学会秋季例会、2016年10月15日、於筑波大学(東京都文京区)

鵜殿えりか、「ヘンゼルとグレーテルの変容 トニ・モリスンの『ホーム』における兄弟の闘争」日本アメリカ文学会中部支部例会、2016年6月18日、於愛知大学(名古屋市)

鵜殿えりか、「トニ・モリスンの小説の物語構造」黒人研究学会例会、2016年4月23日、於立命館大学(京都市)

鵜殿えりか、「トニ・モリスンの『レシタティーフ』」愛知県立大学教育研究発表会、2014年8月6日、於愛知県立大学(長久手市)

Erika Udono, "The Trans-Atlantic Textual Exchange: Nella Larsen and Sheila Kaye-Smith," International American Studies Association 6th World Congress, August 5, 2013, at Szczecin (Poland)

〔図書〕(計 4 件)

鵜殿えりか、風呂本惇子 他、金星堂、『新たなトニ・モリスン その小説世界を拓く』、2017年、250 pp. (pp. i-viii, 195-217)

鵜殿えりか、越川芳明 他、悠書館、『法と生から見るアメリカ文学』、2017年、346

pp. (pp. 45-61)

鵜殿えりか、彩流社、『トニ・モリスンの小説』、2015年、369 pp.

鵜殿えりか、松本昇 他、金星堂、『エスニック研究のフロンティア』、2014年、398 pp. (pp. 218-239)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鵜殿 悦子 (UDONO, Etsuko)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：00128638

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()